



穴
窟

をいろいろいじったら

どうなってしまふのか

いったい

く、まさか

身体の自由を奪われるなんて…

戦いの最中
敵の罠にかかり
凜は指一本動かせない
状態にあった。

ふん、でも覚悟なさい
この程度の魔術
すぐに解いてやるわ！

そんな凜の態度を
面白おかしく眺めながら
男はゆっくりと近づいていった。



あ…あれ？
ここが、こうで
え、あれ…なによこの魔術

どれだけ抵抗しようにも
僅かに身体が痙攣するだけで
一向に術は外れない。
そして……

じい

じい

はておおおー

グッ
グッ
グッ
グッ

びひ、げふ

お、おせり
ごも...おれんじー

ひ、ひい…
や、いやあ

一方的に殴られる恐怖に
凜の心は折れそうになる。

男はその様子を愉快そうに眺める。

「ごめんなさいは？」

…ええ？

「いつかかかってきてごめんなさいは？」
ほらほら

ぐべああばおおおおー！



4、30...

ルキ...ルキルキ

肉臓が攪拌され
血混じりの尿が股間を濡らす。

ピク

ピク

その無様な姿に満足し
己の工房へと涼を運んでいった。

「やあ、お目覚めかな?」

あ…あんだ!

「はは、実は最近魔力不足に
悩んでいてね。
そこでキミの身体に
協力してもらおうと思うんだよ」



男が合図をすると、凜を捉えている触手が動き出す。

「なあに、怖がることはない。
ちよつと魔力タンクとして
改造して使おうと思っただけさ」

ひ…そんな
や、やめなさいー





歪に形を変えるその様子は
凧の精神をガリガリと削っていく。

凧の体内を触手が蹂躞する。

ほおっほおおお！



く...あぐ...あえ

く...あぐ...あえ

げほおおおえ

体内を駆け巡る体液が
胃を食道を蹂躞し
口から逆流した。

ゴホ

ゴホ

グハ

グハ

がほ…がほほ

溺れそうになる凛の様子を
男は心底愉快そうに眺めていた。

「うんうん…いい感じだね。

さて、下でしらえはこんなものかな。

あとはどうやって魔力タンクに改造するか」

ゴキョ

楽しそうに笑う男の声を聞きながら
凜の思考は深い闇の中へ
堕ちていった。

ドク

アア

ドク...



ガッガッ

当たり前でしょ！
バカなの？

「外したら襲いかかってくるでしょ？」

ぐうう
ちよっとコレ外さないよー

ガッガッ



「まったく。口が悪いなあ。
遠○家の当主とは思えない。
まあ、いつか。
改造しちやえば一緒だし」

らっ…ちゅっど何するのよー

「ああ、これも人体改造のお薬だよ。
ちよつとした副作用もあるけど
まあ、別にいいよね」

いいわけあるかあー

「あっはっはっは！
なんだいこの間抜けな穴は！
締りがなさすぎるよ」

「う……さ、ころすー！」

薬の副作用か
凜の肉体は強い性的興奮を
覚えていた。
必死に悟られないように
しているが
まあ、無駄というものだろう。

「はいはい
ついでにこっちにも
注射しとこうか」

ひ、やめ…
らおぼろけち…無罪

ドクエツ

んひらららー
あ、んはははあー



「さて、じゃあ
ちよっと試しに
魔力供給してみようか」

んほおおおー！
や、めでえつてっへええ

「おお、今の時点でも
結構優秀なタンクじゃないか」

んほおおー！
むりむりむりい

しんじやう
しんじやう
しんじやうんほおおおー！

びん



ひらっ…ひらっ…

「ふう…よし。」

もっと薬の量増やしても良さそうだ」

ぷひい

男は満足そうに次の準備を
いそいそと始める。

その間、凛は全身を痙攣させ
絶頂の余韻にひたるのであった。

あひっ…ふっ…



ガァァ

ガァァ

ね、ねえちよつと
ほら…私もなんか…ね
少し、生意気だったかもしれないわ

ごめんなさい
ほ、宝石でよければ
好きなだけ譲るから
ねえ…お願い
もう開放して……



グニッ

「ふはは、そんなみつとも
ない身体で開放しても
いいのかね？」

男は大きく肥大化した
乳房を指さし嘲笑った。

凛のそれはすでに頭よりも大きく
肥大化し、日常生活にも支障を
きたしかねないほどであった。

グニッ

も、もとに戻すのは…

「嫌だが？」

クワッ

ドクドク

ドク

くそー！
殺してやる！
絶対に許さない！

「こわいこわい」

凛は気づいていた。

自分自身がおぞましい何かに作り

変えられているということ……

身体に熱がこもる。

頭がもうろうつとして

思考もおぼつかなくなっていた。

「とりあえず
続きをしようかね」

んほごお！

次の投薬は腸から吸収されるため
アナルに直接パイプを挿入された。
本来排出するための器官に
巨大なそれを挿入され
異物感に思わず情けない声が出た。

ズ
イ
イ

容赦なく注ぎ込まれ
すでにカエルのように
腹が膨れ上がっていた。

ひ、ひら…ひら
ま、まっつて…おえ…
も、もう、無理…破裂しちゃう
やべ…おこお

「大丈夫大丈夫
今の肉体ならそう死にはしないよ
やったね！」

クパン

グブ

グボ



ホビエ

アキラ

エリス

おひよるおおおー

「あーらら

どうしてくれんのさ

まったく良い歳しておもらしですか」

ニヤニヤしながら男が詭うが
反論する力など凜には
残っていなかった。

はあ…はあ…
ひ…ひううん…
ひ、へひら…

ヒッ

ヒッ

ヒッ

今、凛の体内で急速に魔力が
作られている。

肉体は変貌し魔力タンクとして
最適な形へと進化していた。

たぷん

たぷん

はあ…はあ

く…ん…ん…

んんん

「ふはは、いいぞ最高だ！」

大きな乳房にめり込むように
器具が取り付けられる。
これで液状魔力を絞り取る
というのだ。

く……こんな屈辱……

「ははは、どうしたね
そんなに嬉しいかね」

むじゅ

バカなこと……言ってるじゃ
ない……わよ

「うん？おかしいな
すでに魔力は十分
生成されているはずなのだが」

男は首を傾げ凜の様子を
観察している。
このままではいつ魔力が
暴発するか…。

ハア…

びん

ハア…

びん

あ…じゅ

「ああ、そうか

詰まっっているのだなー！」

ひあああああつ

そう言うやいなや

男は刺激を与えるため

余っている乳を鷺掴みにし

乳首に指を挿れ

ぐちゃぐちゃとかき回した。

なな、なに

なにやってるのよ！

そんな、そこは

そんなもの挿れる場所じゃ！

ドグ

ニクイ

ググ

ド

くずくずくずくずー

くずくずくず

くずくずくずくず

くずくず

くずくず

イッパイ

「ははは！
よしよしいぞ！
そうだこれだ！
さあその魔力いただくぞ！」

決壊したダムのように
凜の体内から魔力が放出する。
余剰魔力は母乳となり
ミルクタンクへと排出される。

ゴッ

ムム

んむむむむ
んむむむむむむむ

ぽろぽろー

ドキ

おっ！

「素晴らしい！
素晴らしいぞ凛君！
この魔力の奔流！
やはりキミは一流の
魔術師だ！」

膣からも大量の魔力が噴出する。
凛は強烈な快感の波に
もはや人間の言葉も話せない。

んほおー

ふごーんごほほほおおー

ぐほ…お

グホ

グホ

ほん…んお

「おっと、そろそろ枯渴か。

ふむ、私一人では

いささか魔力補充するのに不便だな。

よし、若い男でもひっかけて

魔力を補充してきたまえ。

…聞いているかね？」

ひ…ひああ

びん

びん